

令和5年度の CHECK POINT

〈ベースとなる授業観〉

「子ども自らが、心ゆくまで探究する」授業

✓ 「自分たちが本当に追究したい研究がそこにあります」

自分の研究をもっと深めたい、学校研究を広く公開して学び合いたいと希望する授業者や学校に手をあげてもらいました。研究数は15となりました。「子ども自らが心ゆくまで探究する」授業をもとにした、独自性が生きる実践研究です。



✓ 「子どもたちと共に歩んでいる道筋が分かる研究です」

授業者や学校が、子どもたちと共にどのように授業づくりをしているのかがわかるように“研究のプロセス”を大切にします。いわゆる学習指導案は、既存のスタイルにとらわれない「私（私たち）」と子どものあゆみとして、分かりやすく工夫したまとめをそれに代えます。



✓ 「指導者ではなく一緒に研究していく共同研究者を置きます」

指導を受けるという形ではなく、共同研究者として一緒に研究に携わってもらう形にします。各分野で造詣の深い先生方に加わっていただき研究に厚みが生まれます。また、共同研究者の先生方には大会当日にワークショップ（もしくは講演）をしていただきます。



参加される皆さんにとって、自らの子ども観や授業観を見返すきっかけや、学校教育活動の活性化を図る一助となることが期待できます。

次ページからは、全15研究の内容を掲載しています。ぜひご覧いただき、全県研究大会にご参加ください！

10
27
Fri

研究者 **屋代遊学会**（千曲市立屋代中学校）

共同研究者 **村瀬公胤**（一般社団法人麻布教育研究所 所長）

学校教育コンサルタント、公認心理士。全国の学校で授業研究の指導助言を行うとともに、海外でJICAプロジェクト等に参加している。

テーマ 遊びながら学ぶ～教科の枠を超えて～

子どもたちが幸福な社会を築いていくための学びという視点で、子どもを軸にして、教科の枠を超えた同じ観点による評価、教科の特性を活かした違う見方による学びをデザインします。また、教師



の「教えたい、身につけてもらいたい」という枠組みだけにとらわれることなく、子どもたちが授業における「遊び」の中で習得したものを自分なりの道具として使い、変容していく学びの姿をご覧いただければ幸いです。

私たちは授業観の転換のきっかけとなるようなアイデアを提案します。授業後の研究会では、参観者も「共同研究者」として今後の教育の在り方について一緒に追究できればと考えています。

10
31
Tue

研究校 **駒ヶ根市立赤穂中学校**

共同研究者 **高柳充利**（信州大学 准教授）

専門は、教育哲学。博士（教育学）。2021年より、信濃教育会 教育研究所 特任所員。

テーマ 探究的な学びを核に据えた授業・行事等の実践を通して、「結び合いの中で生きる個」が育つ学校を、どのようにつくっていくか

昨年度の総合的な学習の時間や特別活動を通して、自分なりの願いや問いをもって活動した本校の生徒たちは、目を輝かせ、自らいきいきと活動に取り組み、人が人の中で人になっていく学びの姿を



示しています。こうした姿や実践から「探究」とか「探究的な学び」ということばを難しく捉えるのではなく、今あるものに工夫を加えながら「磨く」ことで、本校が目指す「結び合いの中に生きる個」の姿につながるのではないかと考えています。

特に、「これまでの授業研究スタイルを廃し、日常的な実践と結びつけるために、ふらっと参観とリフレクションの時間を充実させること」を窓口として、「探究的な学びを全ての教育活動に汎化すること」に着目した研究を進めています。

11

2

Thu

研究者 **小林英成**（伊那市立伊那小学校）

共同研究者 **苫野一徳**（熊本大学大学院教育学研究科 准教授）

哲学者・教育学者。早稲田大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。主な著書に、『どのような教育が「よい」教育か』『「学校」をつくり直す』『学問としての教育学』などがある。

テーマ 子どもたち一人ひとりの“うずちゃん”との世界を、共に歩みながら探りたい

1年生から3年間すごしてきた直組の子どもたちと、38羽の“うずちゃん”とのくらしも、あと半年ほどとなりました。私は1年時、子どもたちが“うずちゃん”を庭で投げるような姿をみて、どう声をかけようか迷いました。しかし、毎日迷いながらも一人ひとりの姿を追うなかで、子どもは“うずちゃん”



と話をしながらすごしているのではと気づき、もっと一人ひとりが発する言葉や表情、行動に目を向けていくことにしました。すると、私が“うずちゃん”のことを考えていないように捉えてきた子どもの姿も、子どもたちと“うずちゃん”には互いに分かり合う世界があるのではないかと感じるようになってきました。私は、共同研究者の苫野一徳先生と研究を進め、一人ひとりの子どもがつくり出す世界を訪ね、子どもを感じ、子どもとともにつくるくらしのおもしろさを、より味わっていきたいです。

11

8

Wed

研究校 **長野市立城東小学校**

共同研究者 **岩川直樹**（埼玉大学 教授）

教育の臨床的な研究をしてきている。教育現場で出会った子どもや教師の姿、教室の出来事や教師の語りにふれながら、そこに起きていることの意味のゆたかさを分かち合うことば（概念）を探ろうとする探究。あらゆる問題を個人の内側に閉じこめる言説が広がる社会のなかで、人と人とのふれあいと分かち合いに教育の根源的な意味があることに立ち返るような時間を共有したいと考えている。

テーマ 創って越える子どもと教師

「上にのっているのは、オレオです。焦がてるわけじゃないですよ。できたら先生も食べてみてください」
「先生！上り棒ができたよ！」「足をこうやって絡めると、靴でも登れるんだ！」「城東山がよく見えるよ！」好きなことを思い切り楽しむ子どもたちの隣にいられる『探究の時間』は、とても面白い



です。与えられたテーマではなく、自分の「好き」から始まる探究の時間だからです。そこには、子どもたちの成長と変化があります。「好き」をエネルギーにして考え、友と協力しながら、乗り越えていく子どもの姿があります。そこに至るまでの経緯の「面白さ」を感じ、隣に立って共に探究していく教師の言葉や見方・考え方・声かけも変化してきました。子どもと教師がともに成長していく探究です。

11
9
Thu

研 究 校 上田市立北小学校

共同研究者 早坂 淳（長野大学 教授）

専門は教育方法学。コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）や教育のユニバーサルデザインや探究をテーマに複数の学校で共同研究を進めている。

テーマ 自ら学びに向かう子ども

本校では、10年後20年後に大輪の花を咲かせる子どもの姿を見据えた教育活動に取り組んでいます。本年度は、生活科と総合的な学習の時間において、本校の強みと課題に合わせた「3つの視点」を手掛かりにする探究活動から、「自ら学びに向かう子どもの姿」について、追究しています。



<3つの視点>

- ①授業づくりの基本（探究的活動における教師の仕掛けと支援）
- ②教科横断的な学び（生活科・総合的な学習の時間で
の学びと各教科の学びが繋がる探究活動の構想）
- ③地域との協働（共に考え、想いを形にしていく地域
住民と子どもの学びの構想）

授業研究会も、参加型を考えています。自校や自分自身にこれらと似た課題を有する方々と語り合ってみたいと思っています。

11
10
Fri

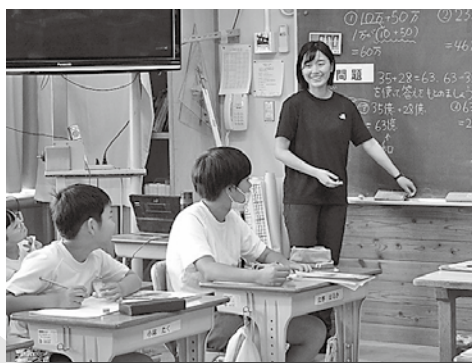
研 究 者 長野市立三本柳小学校

共同研究者 岡野 昇（三重大学 教授・附属教職支援センター長）

専門は学校教育学。博士（心理学）。学びの共同体スーパーバイザーとして、学校現場の授業研究や校内研修に多数関与し、学校教育における学びを推進している。

テーマ 自ら学び続ける力を育むための授業づくりのあり方

本年度から、三本柳小学校では、「自分で考え 伝え合い深める」を具体の姿とするために「聴く受け止める」姿勢を大切に、教師も子どもも、互いに思いを聴き合うことをベースに授業づくり



に取り組んでいます。まず、授業の中で、子どもが友だちの考えを「知りたい」「聴きたい」と思えるような環境づくりから取り組み始めました。そして、教師も子どもも「わからない」という気持ちを大切に、「どこがわからないのか」その気持ちを受け止め、子ども同士で語り合いながら問題解決に向かっていくような授業のあり方についても考えています。共同研究者に三重大学岡野昇教授をお迎えし、三本柳小学校の授業実践を通して、アイデアをいただきながら研究を進めていきたいと考えています。

11
13
Mon

研究者 **小林勝俊**（木曽町立木曽町中学校）

共同研究者 **植原俊晴**（信州大学 助教）

研究分野は理科教育学と教授学習心理学。知識の操作による探究活動の可能性や深い学びの実現、概念の変容などについて研究している。座右の銘は「不易流行」。

📺 生徒一人ひとりが探究的に学ぶ授業づくり

授業実践の省察から、生徒を探究的な学びに引き込むために必要な要素がいくつか見えてきました。例えば、検証方法を立案する場面では、主体的に取り組んではいるものの、科学的な視点で学びが深まっていけない生徒の姿から、「全てを生徒に考えさせようとした『自分』の課題」と出会うこ



とことができました。また、光合成のはたらきと呼吸のはたらきを定量的に追究する場面では、探究意欲があっても、科学的根拠に基づいた解を得られない生徒の姿から、「必要な科学的な見方や考え方を示していない『自分』の課題」と出会うこともできました。

今後も生徒の姿をもとに理科の学習における探究を考えていきます。

11
14
Tue

研究校 **長野市立信更小学校**

共同研究者 **大畑健二**（信州大学 准教授）

子どもたちの気づきや発見、素朴な疑問から始まる学び。教師も子どもと一緒に感じ、味わい、学ぶ一人。子どもと共に創る授業を目指し、教室の子どもたちの声にわくわくしている先生方を応援したい。

📺 子どもが学びの推進者となるための授業づくり

本校は全校児童14名の小規模校ですが、子どもたちは元気いっぱい笑顔いっぱい学んでいます。私たちは、一人ひとりの子どもが自ら「学びの推進者」となるよう、教科担任制を取り入れながら全職員で子どもの学習を支援しています。また、学習の目的に応じて学習方法を自己決定していく機会を



大切に授業づくりや、学年の枠を超えた学びを目指した全校授業に取り組んだり、個別最適な学びを保証する单元内自由進度学習、基礎学力の着実な定着のための「はげみ学習」にも挑戦したりしています。今年度は、運動会などの学校行事や総合的な学習の時間でも、私たちが予め全てを決めてしまうのではなく、子どもと一緒によりよい活動にしていけるパートナーとしてかわっていきたくと取り組んでいます。

11
16
Thu

研究者 熊谷 光（大町市立大町西小学校）

共同研究者 岩川直樹（埼玉大学 教授）

教育の臨床的な研究をしてきている。教育現場で出会った子どもや教師の姿、教室の出来事や教師の語りにふれながら、そこに起きていることの意味のゆたかさを分かち合うことば（概念）を探ろうとする探究。あらゆる問題を個人の内側に閉じこめる言説が広がる社会のなかで、人と人とのふれあいと分かち合いに教育の根源的な意味があることに立ち返るような時間を共有したいと考えている。

📺 協働を軸とした、「やってみたい」から始まる膨らむ学び

今年度、4年1組では「やってみたい」をつなげる学びをテーマに設定しています。今、子どもたちの関心は家を作ることにあります。しかし、そのために必要になる高価な材料に対処することはかなりの難題です。教師も「子ども同士の対話」ばかりに目がいき、子どもたちの空想に現実味を持たせる刺激的な手立てが用意できていませんでした。



先日行った湧水の味比べ活動は、他者との接触が学習を深化させる良い例でした。実体験から興味をもち、もっと学びたいと願う姿がありました。教師として、多様なバックグラウンドを持つ人々との交流を用意することで、子どもたちの「やってみたい」がつながり、現実味を帯びていく実践的な学びを推進したいと考えています。

11
17
Fri

研究校 上田市立第一中学校

共同研究者 松木健一（福井大学 理事・副学長）

「生きる」ということは、自ら問いをもって探究し、納得のいく答えを見つけ出すことである。学校は、本来「生きる」ことを学ぶ場所であって、一人一人が生かされる場所なのだと思っている。

📺 生徒の主体的に学習に取り組む態度の涵養を目指して

「一人ひとりが伸びる第一中学校」の具体を目指し、取組の1つとして毎朝10分間の学習活動である「一中タイム」を実施し、「自らの学びや生活を調整する力の育成」を進めています。その中で子ども自らが課題を設定し、課題を克服するための計画を立て、実行し、実行したことを自己評価して



課題を再設定する取組をすることで、主体的に学習に取り組む態度の涵養を目指しています。

この取組を進めていく中で、全職員で、教師の支援のあり方について改めて考えています。私たち教師が主導で進めるのではなく、子どもたち一人ひとりをできるだけ捉え、「子どもを見取る」「子ども同士を繋げる」ためにはどうすればよいかを研究しています。

11
17
Fri

研究者 川口 純（阿智村立阿智第一小学校）

共同研究者 藤田育郎（信州大学 准教授）

専門は体育科教育学。主な著書（共著）に「初等体育授業づくり入門」「体育科教育学入門【三訂版】」「体育科教育学の現在」。

テーマ 「すべての子が楽しさを感じられる体育学習のあり方」

すべての子が楽しさを感じ、「運動好き」な子が育つ体育学習を目指します。そのために、①児童主体の授業デザイン ②教材化の工夫 ③体育学習を通した思いやりの育成 を中心に据えて研究を進めています。6月には、事前授業として「ティーボール」の授業公開を行いました。事前授業・研究



会を通して、子どもたちの「分かった」が「できる！」につながっていく手立て・授業の展開がテーマの実現に向けて大切であると感じました。共同研究者の藤田先生をはじめ、本校の体育研究部会の先生方、下伊那体育研究会の先生方を中心に多くの先生方にご意見をいただきながら、研究を進めています。

11
29
Wed

研究校 軽井沢町立軽井沢東部小学校

共同研究者 苫野一徳（熊本大学大学院 准教授）

哲学者・教育学者。主な著書に、『どのような教育が「よい」教育か』『「学校」をつくり直す』『学問としての教育学』などがある。

テーマ 対話を大切にした授業づくり・学校づくり

多様な考えをもった人たちがまざりあって共に生きるこの世界。そんな世界では、ときには意見がくい違うこともたくさんあります。自分と異なる意見に出会ったときに、対立を乗り越え、お互いに合意できる地点を見いだすためには何より「対話」が欠かせません。



軽井沢東部小学校は全校児童が139名、各学年が1クラスと小規模な学校です。だからこそ縦割りのグループで集まって遊んだり対話をしたりすることを大切に積み重ねていきたいと思っています。異年齢がまざって様々なテーマについて対話していく中で、多様な考えに触れ、自分の考えをあらためて見つめ、お互いを尊重し合える子どもたちになってほしいと願っています。

11
29
Wed

研究者 北川裕之（伊那市立伊那東小学校）

共同研究者 佐藤和紀（信州大学 准教授）

東北大学大学院情報科学研究科・修了，博士（情報科学），専門は教育工学。2023年独立行政法人教職員支援機構・フェロー。学習者主体のための情報端末の活用や，この時代のメディア・リテラシー，批判的思考について研究しています。

テーマ 個別最適な学習と協同的な学習の一体化

「これからは子どもが自ら学習を調整していく時代」「学ぶことを楽しみ，考えを深めるために自ら学び方を選択し，学ぶことの楽しさを実感できる授業」「モニタリングやアセスメントを取り入れながら，自分のタイミングやペース，特徴・特性に応じて学習目標を選択したり，より良い学習方法を選択したりして，過去の自分よりも成長できるよう相互評価すること」。問いを与えられることを待つこと



から，自ら問いを見つけ出すことへの転換を図るべく，現在は課題解決のための手立てを子どもたちに提示し，自分にとって最適な学び方をそれぞれ模索中です。課題解決のために，子どもたち同士が必然的にかかわる協同的な学びの具体的な姿を，そして，子どもたちの主体性を引き出し，培った情報活用能力を発揮しながら学ぼうとする姿を目指して研究を進めています。

11
30
Thu

研究者 塚田 巧（御代田町立御代田南小学校）

共同研究者 八木雄一郎（信州大学 准教授）

生徒たちが楽しみながら真剣に言語活動に取り組んでいく国語の授業を，授業者の先生とともに創っていきたく願っている。

テーマ 子どもが探究的に学ぶ授業をめざして

子どもが探究しているとは，どういう状態といえるでしょう？

私は，子どもたちの学びが，「教師からやらされているという感覚」から「〇〇したい」と自ら求めている次元へ移行し，没頭している時こそ，探究的な学びが実現されている瞬間なのだと感じています。



本研究では，国語科「読むこと」の領域で子どもが心ゆくまで探究する学びの在り方について研究を行っています。「この言葉や文をもとに捉えると～」「言葉と言葉をつなげると～」「この人物の行動っていいの？」など，友達や材と対話しながら，自分なりの読みをつくっていくことをめざします。

11
30
Thu

研究者 小林一輝（木曽町立開田小学校）

共同研究者 伊藤純郎（筑波大学 名誉教授）

長野県生まれ。筑波大学名誉教授。博士（文学）。専門は歴史学・社会科教育学。主要著書『郷土教育運動の研究』『アジア・太平洋戦争を問い直す』『郷土から問う歴史学と社会科教育』など。

テーマ 満州移民を事例に、地域の歴史から総合的に子どもが追究する授業

「過去の事を学んで何の意味があるのか？」と子どもたちと話題になったことがあります。今の私たちが過去の上に立っていることを、実感をもって理解できていないのだと思います。一方、歴史の授業の中で開田や木曽郡の事例を取り上げると追究の姿が変わることも感じています。木曽郡の歴史



の中では読書村分村という満蒙開拓の歴史があります。私自身これまで満州に渡られた方のお話を聞く機会がありましたが、その歴史を語れる方が少なくなり、危機感をもっています。長野県は全国一満州移民を送出した県であり、長野県において長く続いた戦争を学ぶ上では切り離せない問題であると思います。未来の信州を担う子どもたちといっしょに満州移民の歴史と教訓をどのように伝えたらよいのか、考えられる授業をつくりたいと研究を進めています。

木曽町中学校



信更小学校



城東小学校



研究の歩み

～事前授業の様子から～

上田市立第一中学校



10ページからは、事前授業を参観した研究調査委員から寄せられた、それぞれの研究への期待を掲載しました。

研究者・研究校では、どのように「子ども自らが、心ゆくまで探究する」授業を目指しているのか…参加への参考にしてください。

それぞれの視点で それぞれのアプローチで…

“信教全県研究大会に向けての足どり”

1学期、全県研究大会研究の開催校では、個人型の研究、学校グループ型の研究が粛々と進められていました。研究調査委員がいくつか学校訪問をしました。第2回全県研究調査委員会で報告されたその一端を紹介します。(内容は抜粋しています)

＜大田市立大町西小学校 熊谷 光先生＞

「やってみたい」から始まる他的な膨らむ学び～子どもの見とりの仕切り直しから～

副委員長 小林和子（清野小学校）

総合的な学習の時間、畑で育てた二十日大根を市役所で販売するためのポスターや看板づくりをしていました。「([トトロの森に) 家づくりをしたいんです。どうか協力をお願いします。という熱い思いが書かれています。「家づくり」の資金集めだということが分かりました。「虫食いがあるかもしれませんが、おいしい証拠なので…虫食いは安くします」「中が空の場合があるかもしれませんが…」資金集めと考えると、虫食いだけで安くして売る？ ぜひ協力してほしいと頼み込む？どれも、これまで生きてきた中で、その子



たちが得てきたもののです。教師はそれをどう理解し、子どもたち同士の関係でそれがどう作用し、「膨らんだ」とみていくのか？熊谷先生は、個別に声を掛け、全体に広めるなど「教師の思い」へ向かわせようとせず、子どもたちと接していたのが印象的でした。熊谷先生の「子どもの見とりの仕切り直し」から、どんな“膨らむ学び”が生まれてくるのか楽しみです。

＜駒ヶ根市立赤穂中学校＞

～探究的な学びを窓口にして「結び合いの中に生きる個」が育つ学校づくり～



共同研究者の高柳先生を交えて、竹松校長先生の学校づくりへの思いをお聞きしました。校長先生が職員に示している「探究的な学びを創ろう」(17枚にわたる通信)には校長先生の願う学びが書かれており、それをふまえて、総合的な学習の時間、特別活動、教科学習の3つの窓口から研究を提案していただきます。

(研究調査部 部長) より

＜木曽町立開田小学校 小林一輝先生＞

～地域の歴史と、より大きな地域や世界の歴史をつなぐ「グローバル」学習～



地域の歴史を学ぶことを切り口にして、子どもたちに歴史を学んでほしいという構想の下研究を進めています。小林先生には、歴史学習への強い思いと願いがあります。大会本番に向けては、満州移民（満蒙開拓団）について単元を構想し授業を進めていきます。

共同研究者の伊藤純郎先生にも加わっていただき研究を進めていきます。多くの先生方に参加していただきたいです。

研究調査委員 塚越智英（西箕輪中学校）

研究調査委員 林 久美（開田小学校） より

＜御代田町立御代田南小学校 塚田 巧先生＞

～自らの読みの課題設定、課題解決のための読み、他者と協働した課題解決～



塚田先生は「よい授業づくり」「よい集団づくり」を柱に据えた学級づくりを目指しています。今回の授業でも、分からないとき気軽に先生や仲間に相談できる人間関係、集団が素晴らしいと感じました。国語の授業は「自分が好きな作家を紹介するためのキャッチコピーを作る」場面でした。授業後に話題になったように、文字制限による「好きな作家の魅力を集約する」学習活動が、子どもたちの学びをさらに深める手だてになることを期待しています。

研究調査委員 松澤幸嗣（更級小学校）より

ここで紹介できませんでしたが 阿智第一小学校 川口 純先生 木曽町中学校 小林勝俊先生 上田第一中学校 を参観させていただきました。また、日程が合わずに残念ながら参観できなかった学校もあります。

それぞれの授業者、研究校が肩肘張らず楽しく研究を進めていくことを願っています。